『西南アジア研究』No. 63, 2005

ピラミッド・テキストにおけるエジプト聖刻文字の表記法
―― 語の表記法と文字の用法の分析 ――

永　井　正　勝

は　じ　め　に

古代エジプトの聖刻文字（ヒエログリフ Hieroglyph）に関しては，エジプト学からだけではなく，言語学からも分析や言及がなされている［たとえば河野 1977；西田 1981；塚本 2001；犬飼 2002］。それらの研究の1つである河野 1977 は文字素論[1)]の立場から聖刻文字を分析したものであり，そこでは聖刻文字の特徴として「表語文字と表音文字の混在」［河野 1977：14］が指摘されている。この指摘は聖刻文字表記の本質を看破したものとして受け入れることができるが，河野の解説には肝心な聖刻文字の例が挙げられておらず，我々は表記の具体例を知ることができなかった。だが，その後に出された塚本 2001 において「表語文字と表音文字の混在」の諸相が具体的に示されるようになり，これによって河野の欠が補われることになった。この塚本の論考は世界的に見ても優れた古代エジプト語の文字概説となっており，したがってこのような状況下で聖刻文字について分析を行うのは屋下に屋を架すようで，はばかられる部分がある。だが，あえて本稿を草したのは，塚本の論考に新たな視点を付加しようと思ったからである。それは，語の表記法と文字の用法とを峻別した分析である。

I　聖刻文字について

聖刻文字は古代エジプト語を表記する際に用いられた文字体系の1つである。古代エジプト語では他に神官文字（ヒエラティック），デモティック，ギリシャ文字（コプト文字）という文字体系が使用されていた［永井 2002；2004］。福盛・池田［2002：53］によればヒエログリフは「エジプト語式表語限定子音型エジプト系文字聖刻書体」に分類される。この名称に記されているようにヒエログリフは子音表記を原則とする文字体系であり，子音文字には

1）文字の研究には文字の字形などを扱う文字学と，言語学の一分野として文字を分析する文字素論とがある。後者の研究に対して河野［1977：4］は「文字論」と呼んでいるが，本稿では文字素論という用語を用いることにする。

1子音文字（単子音文字），2子音文字，3子音文字がある。使用された期間は紀元前3100年頃から紀元後4世紀末であり，ゆうに3000年を超える長さであった。文字の数は時代によって異なるが，古エジプト語や中エジプト語では750字ほどであったといわれている[2)]。

なお，ヒエログリフの研究では独自な転写記号が使用されている。この記号は音韻表記ではなく，エジプト学者が作り出した便宜的な記号にしか過ぎない。だが，エジプト学で広く用いられているために，本稿でもそれらの記号を使用することとする[3)]。

II 先行研究の検討

「はじめに」で記したように聖刻文字に関する塚本の論考［2001］は世界的に見ても優れた内容を持つ。そこで本章では塚本の論考を概観しようと思うが，その前にエジプト学における文字研究の事例としてKammerzellの論考について概観しておきたい。

かつてKammerzell［1995：XXXV-XXXVI］は，中エジプト語の小説である「シヌへの物語」を取り上げ，聖刻文字の使用法について分析を行っていた。それは「シヌへの物語」（B 1 ～B 40）の約250例の語を対象としたものであり，その資料の中で使用されていた文字は，述べ数で1002，文字の種類は159であったという。文字の分類の内訳としてKammerzellは表1のような内容を示している。

表1 Kammerzell［1995：Tab 4（一部改変）］による文字の分類

文字の分類（Zeichenklassen）	述べ数	文字の種類
主要字素（Elementalgrammeme）	55%	17%
その他の字素（sonstige Grammeme）	11%	30%
表語文字（Ideogramme）	15%	23%
限定符（Determinative）	19%	30%
合　計	100%	100%

このKammerzellの研究の優れた点は，対象を特定のテキストに限定して分析を行い，結果を数量化して示したことにある。また，表語文字の割合が15%であるという結果は，聖刻文字の用法が主に表語文字であるという一般的なイメージを否定する上で重要なものだといえる。だが，同時に問題点も散見されるので，以下にそれを指摘する。

第一の問題点は，具体的な文字の例がほとんど示されていないことにある。したがって，彼がどの文字をどの分類に当てはめたのかということが不明である。このような内容では後続の研究者が彼の分析結果を発展させることができない。

2） その他の情報については塚本2001を参照。
3） 転写記号に関する詳細はGardiner 1957：§ 19を参照。

第二の問題点は，表語文字と表音文字という単純な二項対立が見られる点である。実際には表語文字も音を示すのであるから，表語文字と表音文字という単純な二項対立は文字の分類としては不十分なものとなる[4]。加えて，表語文字の下位区分が想定されていない点も，表語文字と表音文字の二項対立による影響であるように思われる。

第三の問題点は，語を単位とした分析がない点である。聖刻文字の表記では1文字が1語となることが少なく，複数の文字で語が構成されることの方が多い。だとすれば，語の表記がどのような構造をなしているのか，ということも分析の対象となってしかるべきであろう。

次に，塚本2001［148－153］の内容を検討する。塚本は古王国時代の「ピラミッド・テキスト」に資料を限定した上で，表語文字，表音文字，限定符の3つの分類を立て，具体例を提示している。この研究の優れている点は，Kammerzellの分析と同じように，具体的なテキストに基づいて用例を検討している点にある。また優れた点の二つ目は，分類項目のすべてに具体的な例が示されていることにある。この点，Kammerzellの論考とは対照的である。そして三つ目は，表語文字が下位区分されている点である。上で述べたKammerzellの研究を含め，欧米の研究では表語文字の下位区分が設定されていないことが多い[5]。これはおそらく，表語文字と表音文字という二項対立の思考が強く影響しているものと思われるが，塚本による表語文字の下位区分は，そのような二項対立を克服するものとなる。

だが，塚本の研究で明らかにされていない点もある。それは，語の表記法に関する体系的な説明である。塚本の論考において，語の表記法に関する内容が随所で述べられてはいるものの，しかしながらそれらの解説が文字の分類の中に吸収されているために，結果的に語の表記法が見え難くなっているのである。

以上，Kammerzellと塚本の研究を簡単に紹介したが，最後に，対象としている文字体系が両者の研究で異なっている点を指摘しておきたい。つまり，Kammerzellが使用した「シヌへの物語」が神官文字（ヒエラティック）で書かれているのに対して，塚本の使用した「ピラミッド・テキスト」は聖刻文字（ヒエログリフ）を用いたものである。神官文字は聖刻文字の筆記体であり，文字素[6]のレヴェルで両者は概ね1対1の対応を示す。しかしながら神官文字には，聖刻文字の字形の全体を筆記体にしたものばかりでなく，聖刻文字の一部分のみを切り出して筆記体にしたものが含まれている。エジプト学では神官文字を聖刻文字に改めた資料集を底本として使用することが多く，その結果，神官文字で書かれた資料が「ヒエログリフ Hieroglyph」の文法書に含まれることになる。文法解説の上ではそれで良

4）なお福盛・池田2002では表語文字の表音機能を盛り込んだ分類案が提示されており，表語文字と表音文字という単純な二項対立が解消されている。

5）Schenkel［1997］による分類も「Semogramm（表義文字）」と「Phonogramm（表音文字）」の弁別を基盤としており，表語文字と表音文字の単純な二項対立から抜け切れていない。

6）文字素とは「字形の異なりを捨象して得られる文字観念」［樺島1977：34］を指す。

いとしても，文字の分析の上では聖刻文字と神官文字とを区別する必要があるだろう。

Ⅲ 方法と資料

「Ⅱ 先行研究の検討」で Kammerzell と塚本の研究の利点と問題点，そして対象とする書体の違いについて概観したが，それらの結果を踏まえると，聖刻文字の分析のために次のような 4 つの方法を採用することが適切であるように思われる。

① 聖刻文字で表記された具体的なテキストを分析の対象とする

② 事例はすべて列挙し，数量化して結果を表示する

③ 表語文字を下位区分する

④ 語の表記法と文字の用法とを分けて分析を行う

本稿ではこの 4 つの方法を満たすべく分析を行なうが，その際に使用するテキストにはウナス王の「ピラミッド・テキスト」[7] を選定することにした[8]。具体的には，呪文 273 を用い，その冒頭から 50 個分の語を抜き出して検討を行う。

この際に問題となるのが語の認定であるが，本稿では次のような基準で語を設定した。動詞に付される時制標識については，それらが動詞の限定符の後に表記されるために語として認定する[9]。また，女性語尾，複数接辞，抽象名詞を作る接辞など，限定符の前に入り込む要素は語として認定しないことにする。そして，分詞の名詞化は名詞として扱うことにする。

Ⅳ 語の表記法の検討

ウナス王の「ピラミッド・テキスト」の呪文 273 を用い，その冒頭から 50 個分の語[10]を抜き出して検討を行った結果，50 語の表記法は，（1）表音文字のみからなる語，（2）表音文字に限定符が付された語，（3）表語文字を中心とした語，の 3 つに分類されることとなった[11]。以下，それらの事例を紹介する。

7） ヒエログリフの原典には Piankoff 1968 を用いた。原典は右から左に向かって改行を行う縦書きであるが，引用に際しては横書きに改めた。なお杉他 1978 : 587 に呪文 273 の邦訳がある。

8） 塚本［2001 : 図 2］もウナス王の「ピラミッド・テキスト」を使用しているが，本稿と塚本の分析とでは，使用している箇所が異なっている。

9） これらは実際には形態素と呼ぶべきものかもしれないが，本稿では便宜的に語という用語で統一しておく。

10） ここでいう 50 個分の語とは語の延べ数を指す。なお，分析した語に対して資料の冒頭から順に pt1, pt 2 という番号を与えた（pt は「ピラミッド・テキスト」の略）。以下ではこの番号を「pt 番号」と呼ぶ。

11） 50 語の中には同一の語が複数回現れているものもあり，実際の語の種類は 35 であった。（以下に挙げた（35）と（36）は同じ語）。

1　表音文字からなる語

50 例中の 32 例がこれに該当する。以下，その例を品詞ごとに列挙する[12)]。

動詞［2 例］

（1）　*iḥy*（陰る）「音（*i*）＋音（*ḥ*）＋音（*y*）」［pt 3］

（2）　*gr*（止まる）「音（*g*）＋音（*r*）」［pt 10］

名詞［11 例］

（3）　*gnm. w*（動き）「音（*g*）＋{音（*n*）}＋音（*nm*）＋音（*w*）」［pt 13］

（4）　*wnis*（ウナス）「音（*wn*）＋{音（*n*）}＋音（*i*）＋音（*s*）」［pt 17，30，42］

（5）　*it. w*（父 pt）「〈音（*i*）＋音（*t*）〉＋〈音（*i*）＋音（*t*）〉＋〈音（*i*）＋音（*t*）〉」［pt 24］

（6）　*wšb*（食べて生きる者）「音（*w*）＋音（*š*）＋音（*b*）」［pt 26］

（7）　*nb*（主）「音（*nb*）」［pt 32］

（8）　*sꜣb. wt*（知恵）「音（*sꜣb*）＋{音（*b*）}＋音（*w*）＋音（*t*）」［pt 33］

（9）　*rn*（名）「音（*r*）＋音（*n*）」［pt 38］

（10）　*šps. w*（栄光）「音（*š*）＋音（*p*）＋音（*sw*）＋{音（*w*）}」［pt 41］

（11）　*wsr*（力）「音（*wsr*）＋{音（*r*）}」［pt 46］

代名詞［8 例］

（12）　*sn*（彼ら）「音（*s*）＋音（*n*）」［pt 12，16］

（13）　*f*（彼の）「音（*f*）」［pt 25，29，37，39，47］

（14）　*pi*（この）「音（*p*）＋音（*i*）」［pt 31］

12）以下，事例の紹介は，（例文番号），聖刻文字，転写記号，（訳），「文字の種類」，［pt 番号］の順で示す。文字の種類における「表」は表音文字，「限」は限定符，「形」は象形，「転」は転用，「徴」は象徴を示す。また「文字の種類」の部分において，音声補充の文字は｛　｝で，そして写像性のある文字は〈　〉で括って表現した。

前置詞［7例］

(15) *r*（対して）「音（*r*）」［pt 11］

(16) *m*（として）「音（*m*）」［pt 18, 23, 27, 43, 48］

(17) *mi*（のように）「音（*mi*）」［pt 50］

小辞・接辞［4例］

(18) *iw*（－）「音（*i*）＋音（*w*）」［pt 40, 45］

(19) ＝*n*（－）「音（*n*）」［pt 15, 35］

ここで，聖刻文字表記の特徴として，音声補充（phonetic compliment）と写像性（iconicity）について述べておきたい。音声補充とは，2子音文字や3子音文字の音の一部（あるいは全部）を1子音文字で示したものであり，日本語の振り仮名に近い。（3）では，2子音文字の *nm* の前に書かれた *n* が音声補充である。また（8）では3子音文字の *sʒb* の音声補充として *b* が付加されている。

また写像性とは現実世界の諸相が言語に反映されたものをいう［Haiman 1980］。たとえば混雑した遊園地の様子を「遊園地は大変な混雑で，どこを見ても人，人，人であった」などと表現した場合，「人，人，人」という言葉の繰り返しが写像性と呼ばれる。エジプト語で「父」という単語の単数形は *it* であるが，これを複数形にすると音の上では *it. w* となる。ところが，表記の上では *it it it* と書かれる（5）。だが，*it it it* と表記されても読み方は *it. w* となる。本稿ではこのようなものを表記上の写像性と呼ぶことにしたい。（5）は表音文字からなる語であるが，ここに表記上の写像性が加わることによって，語の弁別という意味では表語性を併せ持つことになる。

2 表音文字に限定符が付された語

50例中の11例がこれに該当する。以下，品詞ごとに例を列挙する。

動詞［5例］

(20) *gp*（曇る）「音（*g*）＋音（*p*）＋限」［pt 1］

(21) *nmnm*（震える）

「音(*nm*)＋{音(*n*)＋音(*m*)}＋音(*nm*)＋{音(*n*)＋音(*m*)}＋限」［pt 5］

(22) *sdʒ*（わななく）「音（*s*）＋音（*d*）＋音（*ʒ*）＋限」［pt 7］

(23) 　*mꜣ*（見る）「音（*mꜣ*）＋限」[pt 14]

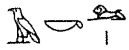
(24) 　*ḫm*（知らない）「音（*ḫ*）＋音（*m*）＋限」[pt 34]

名詞［6例］

(25) 　*p. t*（天）「音（*p*）＋音（*t*）＋限」[pt 2，42]

(26) 　*pḏ. wt*（弓 pl）「音（*p*）＋音（*ḏ*）＋音（*t*）＋〈限＋限＋限〉」[pt 6]

(27) 　*ḳs. w*（骨 pl）「音（*ḳ*）＋音（*s*）＋〈限＋限＋限〉」[pt 8]

(28)  　*ꜣkr. w*（神 pl）「音（*ꜣ*）＋音（*k*）＋音（*rw*）＋限」[pt 9]

(29) 　*ꜣḫ. t*（地平線）「音（*t*）＋音（*ꜣḫ*）＋限」[pt 47]

「表音文字＋限定符」という構造を持つこの種の語は，漢字の六書の形声に相当する単位となっている。注意すべきことは，1字節で1語となる漢字の場合は1字節の中に「音符と義符」が含まれることになるが，聖刻文字の場合には音符として機能する文字と義符として機能する文字とが合わさった文字列が，形声をなす単位になることである。

なお，このグループにも音声補充（21）と写像性（26，27）が見られる。加えて（29）の例では，音列の上で最後に来るべき *t* が表記の上では最初に位置している。これは，文字の審美的な配置を配慮した倒置である。

3　表語文字を中心とした語

50例中の7例が表語文字を中心とした語である。ここで「表語文字で書かれた語」ではなく「表語文字を中心とした語」という表現を採用したのは，聖刻文字においては1字節＝1語になる場合に加え，接辞や音声補充の文字が表語文字に付加される場合があるからである。本稿では表語文字を中心とした語を，象形，転用，象徴の3つに区分した。

A：象形［1例］

象形とは文字の形が語の意味と一致するものをいう。(30) は星をかたどった象形文字であり，これが「星」という意味の語となっている。なお，(30) は表記上の写像性によって複数形となっている。

名詞

(30) ★★★　*sbꜣ. w*（星 pl）「〈形（*sbꜣ*）＋形（*sbꜣ*）＋形（*sbꜣ*）〉」[pt 4]

B：転用［1例］

転用とは形を持たないものを他の形で比喩的に表現したもの，あるいは語のイメージを図示したものをいう。(31) は「現れる」という意味の語を「ご来光」で表現したものである。

動詞

(31) *ḫ'* (現れる)「転 (*ḫ'*)＋{音 ('')}」[pt 18]

C：象徴［5例］

これはエジプト文化と密接に関わる文字の使い方である。エジプトは上流の上エジプトと下流の下エジプトとに地域が二分されており，上エジプトを代表する植物はスゲで，また下エジプトを代表する植物はパピルスであった。そこでスゲやパピルスをかたどった文字がそれぞれ上エジプトと下エジプトという語を表象するようになった。このような文字を本稿では象徴と呼ぶことにする。本稿で設定した象徴は，塚本［2001：151］のいう「元来は標識または象徴として使われた文字が，特定の単語と結びつき，もっぱらその語を表記するための文字として定着した場合」に近似しているものと思われる。

動詞

(32) *bꜣ* (霊魂になる)「徴 (*bꜣ*)」[pt 19]

名詞

(33) *nṯr* (神)「徴 (*nṯr*)」[pt 21]

(34) *'nḫ* (生きる者)「徴 (*'nḫ*)」[pt 22]

(35) *mw. wt* (母 pl)「〈徴 (*mwt*)＋徴 (*mwt*)＋{音 (*t*)}＋徴 (*mwt*)〉」[pt 28]

(36) *mw. t* (母)「{音 (*t*)}＋徴 (*mwt*)」[pt 36]

以上，分析対象とした資料のすべてを確認したが，最後に，総括を行なう（表2）。

表2　pt 1 –pt 50 における語の表記法の分類（N＝50）

	表音のみ	表音＋限定	表語中心			合計
			象形	転用	象徴	
動　　詞	2	5		1	1	9
名　　詞	11	6	1		4	22
代 名 詞	8					8
前 置 詞	7					7
小辞・接辞	4					4
合　計	32	11	1	1	5	50
	64%	22%	2%	2%	10%	100%

聖刻文字は，そのほとんどが森羅万象をかたどった象形文字であり，しかも字形が写実的であるため，聖刻文字の用法としては表語（象形）が多いとの印象を受けるかもしれない。しかしながら，実際には表音文字の使用が多く，したがって表2からわかるように語の表記法においても表音文字からなる語が多い。しかも，表音文字からなる語は，代名詞，前置詞，小辞・接辞ばかりでなく，名詞や動詞にも現れる。逆に，表語文字の代表ともいえる象形文字の語は，わずかに1例のみである。表語文字を中心とした語のすべての例を合わせても7例しかなく，これは全体の14%にしか過ぎない。このように，聖刻文字で書かれた「ピラミッド・テキスト」では，表音文字からなる語が最も多い。

V　文字の用法の検討

本章では個別の文字ごとに，その用法を検討する。50の語に対して，文字の延べ数は124，文字の種類は48であった。その一覧は表3に示した通りである[13]。表3からわかるように，対象とした資料では一部の1子音文字が表音文字と音声補充の用法を併せ持つが，それ以外の文字では1つの文字が1つの用法のみを担っている。

表4は表3の内容を整理したものである。表4では横軸に文字の用法を，縦軸に文字の持つ音の数をそれぞれ示した。これによってKammerzell［2005］やSchenkel［1997］の研究で見られたような表語文字と表音文字という単純な二項対立を回避することができる。

表4の結果からも，表音文字の割合が高く，表語文字の割合が低いことがわかる。音声補充も表音文字の一種であるから，表音と音声補充とを合計すると98例となり，全体の80%に近い割合となる。それに対して表語文字は全部で11例しかなく，その割合は全体の10%以下である。このように個別の文字ごとに用法を分析した場合，語の表記法の分析よりも，表音文字の割合が増すことになる。

13）表3の文字番号はGardiner 1957に従った。

表3　pt 1 –pt 50 で使用されている文字の一覧

No.	文字	文字番号	転写	音	用法	例数	箇所（pt 番号）
1		D 4	—	なし	限定	1	14
2		D 21	*r*	1 子音	表音	3	10, 11, 38
					補充	1	46
3		D 35	—	なし	限定	1	34
4		D 36	ʿ	1 子音	補充	1	18
5		D 46	*d*	1 子音	表音	1	7
6		D 54	—	なし	限定	1	5
7		D 58	*b*	1 子音	表音	1	26
					補充	1	33
8		E 17	*sꜣb*	3 子音	表音	1	33
9		E 23	*rw*	2 子音	表音	1	9
10		E 34	*wn*	2 子音	表音	3	17, 30, 42
11		F 12	*wsr*	3 子音	表音	1	46
12		G 1	*ꜣ*	1 子音	表音	2	7, 9
13		G 14	*mwt*	3 子音	象徴	4	28, 28, 28, 36
14		G 17	*m*	1 子音	表音	6	20, 23, 27, 34, 43, 48
					補充	2	5, 5
15		G 25	*ꜣḫ*	2 子音	表音	1	49
16		G 29	*bꜣ*	2 子音	象徴	1	19
17		G 33	—	なし	限定	1	7
18		G 43	*w*	1 子音	表音	5	13, 26, 33, 40, 45
					補充	1	41
19		I 9	*f*	1 子音	表音	5	25, 29, 37, 39, 47
20		I 10	*ḏ*	1 子音	表音	1	6
21		M 17	*i*	1 子音	表音	10	3, 17, 24, 24, 24, 30, 31, 40, 42, 45
22		M 17 ＋M 17	*y*	1 子音	表音	1	3
23		M 23	*sw*	2 子音	表音	1	41
24		N 1	—	なし	限定	2	2, 44
25		N 4	—	なし	限定	1	1
26		N 14	*sbꜣ*	3 子音	象形	3	4, 4, 4

表3　pt 1–pt 50 で使用されている文字の一覧（続き）

No.	文字	文字番号	転写	音	用法	例数	箇所（pt 番号）
27		N 18	—	なし	限定	1	49
28		N 28	*ḫ‘*	2 子音	転用	1	18
29		N 29	*ḳ*	1 子音	表音	1	8
30		N 35	*n*	1 子音	表音	5	12, 15, 16, 35, 38
					補充	6	5, 5, 13, 17, 30, 42
31		N 37	*š*	1 子音	表音	2	26, 41
32		Q 3	*p*	1 子音	表音	6	1, 2, 6, 31, 41, 44
33		R 8	*nṯr*	3 子音	象徴	1	21
34		S 29	*s*	1 子音	表音	7	7, 8, 12, 16, 17, 30, 42
35		S 34	*‘nḫ*	3 子音	象徴	1	22
36		T 9	—	なし	限定	3	6, 6, 6
37		T 19	—	なし	限定	3	8, 8, 8
38		T 34	*nm*	2 子音	表音	2	5, 5
39		T 35	*nm*	2 子音	表音	1	13
40		U 1	*mꜣ*	2 子音	表音	1	14
41		V 28	*ḥ*	1 子音	表音	1	3
42		V 30	*nb*	2 子音	表音	1	32
43		V 31	*k*	1 子音	表音	1	9
44		W 11	*g*	1 子音	表音	3	1, 10, 13
45		W 19	*mi*	2 子音	表音	1	50
46		X 1	*t*	1 子音	表音	8	2, 6, 24, 24, 24, 33, 44, 49
					補充	2	28, 36
47		Z 1	—	なし	限定	1	9
48		Aa 1	*ḫ*	1 子音	表音	1	34

表4　pt 1 -pt 50 における文字の用法（N＝124）

用法／音	表音文字	音声補充	限定符	表語文字			合計
				象形	転用	象徴	
1子音	70	14	—				84
2子音	12	—	—		1	1	14
3子音	2	—	—	3		6	11
ゼロ	—	—	15				15
合計	84	14	15	3	1	7	124
%	67.74%	11.29%	12.10%	2.42%	0.81%	5.65%	100.00%

最後に本稿の分析結果（表4）をKammerzellの分析結果（表1）と比較してみる。表5は，両者の結果を対比させたものである[14)]。

表5　文字の用法に関するKammerzellと本稿の分析結果の比較

	表音文字	表語文字	限定符
「シヌへの物語」神官文字 Kammerzellの分析結果（表1）	66%	15%	19%
「ピラミッド・テキスト」聖刻文字 本稿の分析結果（表4）	79%	9%	12%

Kammerzellは神官文字で書かれた資料を，そして本稿では聖刻文字で書かれた資料をそれぞれ分析対象としていたのであるから，2つの結果を簡単に対比させることに慎重でなければならないのだが，あえて分析結果を比較するならば，次のようなことがいえるであろう。つまり，いずれの分析においても表音文字の割合が飛び抜けて高いことがわかるが，本稿で用いた「ピラミッド・テキスト」の方が「シヌへの物語」よりも表音文字の割合が高い。

この結果には様々な要因が想定できるが，本稿では「ピラミッド・テキスト」で表音文字が多いということについて，エジプト学の立場から若干のコメントを提示しておきたい。塚本［2003:43］によって指摘されているように，ピラミッド・テキストにおける「人々（*rmṯ*）」なる語においては古い資料ほど表音文字のみで書かれ，新しい資料になるほど限定符が付されるようになる。つまり，ピラミッド・テキストにおける表音文字の多さは，逆をいえば限定符の少なさを示していることになる。このように，ピラミッド・テキストで限定符が少ないことの理由としては，文字の持つ象形性を恐れ，危害をもたらす動物などの絵をあえて墓の中に表現しなかったことが既に指摘されている［塚本2001: 153］。だとすれば，ピラミッド・テキストにおける表音文字の多さは，文字の表音性を意識した結果というよりも，むしろ字形の持つ象形性を強く意識していたことの裏返しとして理解されるべきものだといえる。

14）比較に際して，Kammerzellのいう主要字素とその他の字素が表音文字としての用法であるとみなし，両者を一括した。また本稿の分析結果においては，小数点以下第一位で四捨五入を行なった。

お わ り に

本稿では語の表記法と文字の用法とを区別し，具体的な資料を提示した上で聖刻文字の分析を行なったが，その結果わかったことは，表音文字の使用が他の用法を凌駕して多いという事実である。

エジプトの聖刻文字は，文字そのものが象形によって形成され，しかも文字の表現方法が極めて写実的である。このような表面的な状況を見ていると，ヒエログリフが表語文字（特に用法としての象形）を中心とする文字体系であるかのような錯覚を覚える。しかしながら語の表記法や文字の用法を虚心坦懐に見た場合，表音の例が他の用法を凌駕して多く，逆に表語（とくに象形）の例が最も少ないことが了解される。もちろん，この状況は対象とする資料によっても異なることではあるが，接辞や小辞など象形では表し難い内容が言語に包含されていることを考えれば，表音文字の割合が多いことは，むしろ納得のいくところである。

参 考 文 献

福盛貴弘・池田潤（2002）文字の分類案：一般文字学の構築を目指して『一般言語学論叢』（筑波一般言語学研究会）4-5, 32-56.

Gardiner, A.（1957）*Egyptian Grammar*. Oxford.

Haiman, J.（1980）The Iconicity of Grammar: Isomorphism and Motivation. *Language* 56（3），515-540.

犬飼　隆（2002）『文字・表記探求法』シリーズ〈日本語探求法〉5　朝倉書店.

樺島忠夫（1977）文字の体系と構造『文字』岩波講座日本語 8　岩波書店，23-60.

Kammerzell, F.（1995）Zur Umschreibung und Lautung. In: Hannig, R., *Großes Handwörterbuch ägypisch-Deutsh*（*2800-950 v. Chr.*）. Mainz, XXIII-LIX.

河野六郎（1977）文字の本質『文字』岩波講座日本語 8　岩波書店，1-22.

永井正勝（2002）『必携　入門ヒエログリフ』アケト.

永井正勝（2004）コプト語　日本オリエント学会（編）『古代オリエント辞典』岩波書店，483-484.

西田龍雄（1981）世界の文字　西田龍雄（編）『世界の文字』講座言語 5　大修館書店，5-41.

Piankoff, A.（1968）*The Pyramid of Unas*. Princeton.

Schenkel, W.（1997）*Tübinger Einführung in die klassisch-ägyptische Sprache und Schrift*. Tübingen.

杉勇他訳（1978）『古代オリエント集』筑摩世界文学大系 1　筑摩書房.

塚本明廣（2001）エジプト文字『言語学大辞典　別巻　世界文字辞典』三省堂，144-162.

塚本明廣（2003）『古王国時代エジプト聖刻文字法の研究（機械可読データベース化の試み）』平成 11 年度～平成 14 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）研究成果報告書（課題番号 11610563）.

（日本学術振興会・筑波大学大学院人文社会科学研究科）